

障がい学生支援

今年度前期も引き続き新型コロナウイルスの影響を受け、学生支援スタッフや利用学生とのコミュニケーションは主にZoomやSlackを用いて行いました。弱視学生の支援では、今学期新たにテキストの電子書籍化作業を行いました。パソコンの作業に不慣れな1年生や本支援の利用学生と共に、どうしたら適切な書式設定になるのか試行錯誤しながら活動を行いました。特にフォントサイズだけでなく、一般的な強調法(太字や色を変えるなど)は必ずしも弱視学生のためには適切なものではないことを、学生支援スタッフは身をもって感じる事が出来たのではないかと思います。また、聴覚障がい学生への支援では、オンラインでの授業支援のみであった事から、学生支援スタッフと利用学生の関係性の構築が難しかったのですが、「大学生のための手話はじめ」と称した手話講座の定期開催などを通じ、人間関係の構築を図ったことは後期の支援に向けても大きな取り組みでした。

実際に学生支援スタッフが対面で利用学生に会ったときには「あっ、やっと会えましたね」「思ったより背が大きいんですね」とお互いに話す様子が見られたり、「ああ、思ったように指文字が出てこない」という戸惑いを感じる事が出来たのは貴重な経験であったのではないかと思います。今後もまだ収束の時期が見られない新型コロナウイルスですが、学生支援スタッフと利用学生の双方にとって障がいへの理解がより深められるような働きかけを、タイミングを見計らいつつ増やしていけたらと思います。(益子)



よるダイバー



新入生をメインに、本学学生のダイバーシティ推進室とその取組みに対する認知を高めるとともに、ダイバーシティの概念や関連する課題などへの理解を促すことを目指し、「よるダイバー」を開催しました。2019年度までは「ランチタイムレクチャー」として実施していましたが、新型コロナウイルスの影響で2020年度は実施できず、今年度前期は金曜18時からの1時間、オンライン形式での開催となりました。男女共同参画、障がいのある構成員支援、多様性を踏まえた構成員支援というダイバーシティ推進室の活動の柱に沿ったテーマについて、全8回のミニレクチャーやディスカッションなどを行いました。今回は、南インドをフィールドに取材活動を行ってきた写真家の齊藤小弥太さん、視覚障がいを持つ本学大学院生の築島瞬さんをゲスト講師に迎えたことで、より多様な視点を学ぶことができたのではないのでしょうか。

参加者からは、「障がい者支援に関心があって参加したが、セクシュアル・マイノリティやジェンダーの話にも興味を持った」「話を聞くだけでなく、お互いの考えを話し合う場面もあって勉強になった」などの感想が聞かれました。ダイバーシティ推進室では、後期も同様の取組を行う予定です。関心のある方の参加をお待ちしています。(藤山)

よるダイバー2021前期 コンテンツ

- 4月23日 ダイバーシティ推進室の取組み紹介 / 講師: 藤山新、益子徹
- 4月30日 障がい者支援から見るダイバーシティ / 講師: 益子徹
- 5月14日 フェミニズムなんて怖くない / 講師: 藤山新
- 5月21日 アライで行こう! / 講師: 藤山新
- 6月11日 南インドの「死を待つ家」に学ぶ / 講師: 齊藤小弥太(写真家)
- 6月25日 「お先真っ暗な人生」の話 視覚障がい当事者の経験と一見解 / 講師: 築島瞬(本学大学院生)
- 7月 2日 ジェンダーの視点で見るスポーツ / 講師: 藤山新
- 7月 9日 合理的配慮とダイバーシティ / 講師: 益子徹

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」オンライン見学会を開催します!

待機児童が大きく減少したとはいえ、特に年度の途中から保育園に入ることは難しいもの。生後間もないお子さんならなおさらです。そんな時、役に立つのが、本学の教職員、学生を対象とした一時保育施設、通称「都立大KIDS」です。今回は、現在子育て中の方、これから子育てを予定している方を対象に、一時保育施設の様子を知ることができるオンライン見学会を開催します。



オンライン見学会 ~都立大KIDSって、どんなところ?~

日時: 2021年9月3日(金) 10時~11時15分
会場: zoomによるオンライン開催
対象: 子育て中、または子育てを予定している本学の構成員
(現在の子どもの有無、参加者の性別は問いません)

プログラム
保育施設紹介動画上映
参加者の自己紹介
園長より保育施設の概要紹介
利用者の声 質疑応答
利用手続きのご案内

編集後記

新型コロナウイルスの猛威がおさまらない中、新年度が始まり、イベントや講習会はオンラインを軸に開催をしています。オープンキャンパスもWEBでの開催となりましたが、ダイバーシティ推進室のコーナーでは紹介動画などを公開していますので、ぜひご覧ください。(兼子)
https://www.tmu.ac.jp/entrance/faculty/open_campus/weboc/31075.html#diversity

東京都立大学 ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階
電話: 042-677-1337(直通) / 内線2571 FAX: 042-677-1355
E-Mail: diverwww@tmu.ac.jp
URL: <https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/>
発行日: 2021年8月25日

編集・発行

No.29 August 2021 Newsletter

ダイバーシティ通信



「DIVERSITY WEEK 2021」開催報告

ダイバーシティウィーク2021を終えて



開会のあいさつを行う伊藤ダイバーシティ推進室長

2021年6月14日(月)~18日(金)の5日間、「ダイバーシティウィーク2021」をオンラインで開催しました。

このイベントは、「男女共同参画の推進」「障がいのある構成員の支援」「多様性を踏まえた構成員支援」という、ダイバーシティ推進室の3つの取組を広く知ってもらうことを目指して行われたものです。期間中は、講演会や映画の上映会など、多様なプログラムを開催し、教員、職員、学生あわせて92名に参加していただきました。また、特設Webサイトでは、ダイバーシティ推進室の取組を紹介する動画やポスターを公開しました。各イベントの詳細については、本ニュースレターの記事をご覧ください。

イベントに参加した方からは、「ダイバーシティ推進室の存在をこういうイベントで知ることができてよかったです」「講師の雰囲気もよく、話が分かりやすかったので良かった」「学部生、院生、職員の方々など様々な立場からの見方を知ることができて勉強になりました」などの声をいただきました。

ダイバーシティ推進室では、今後も「男女共同参画の推進」「障がいのある構成員の支援」「多様性を踏まえた構成員

支援」にかかわる、さまざまなイベントを開催する予定です。ダイバーシティ推進室Webサイトのほか、ダイバーシティ推進室公式Twitter(@diver1_official)でも情報を発信していますので、この機会にぜひフォローしてください。

改めて、ご参加いただいたすべての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。(藤山)

DIVERSITY WEEK 2021 映画上映会 「HAFU ハーフ」



ダイバーシティウィークのオープニングは、文化的多様性を学ぶことを目的として、いわゆる「ハーフ」の人々を追ったドキュメンタリー映画『HAFU』の上映会を行いました。2013年に公開された本作に登場するのは、日本とオーストラリア、ガーナ、メキシコ、ベネズエラ、韓国それぞれの国にルーツを持つ5人。日本へのかかわり方も生い立ちもそれぞれの5人が直面している/してきた困難を率直に語り、またこれからの夢や希望を語る姿からは、「ハーフ」と呼ばれる人の中でも一人ひとり感じることは異なるということが改めて実感されます。それと同時に、見た目による決めつけやルーツになった国に対する偏見、アイデンティティの不確かさなど、共通した困難も知ることができます。「ダイバーシティ」の大きな要素でもある人種や文化、国籍の「多様性」は、果たして日本でどこまで達成されているのか。複数のルーツを持つ「ハーフ」の人たちが葛藤なく暮らしていける社会とはどのように実現することができるのか。本作からはそうした問題意識を学ぶことができたのではないのでしょうか。(藤山)

Contents

- 1 「DIVERSITY WEEK 2021」開催報告
映画上映会「HAFU ハーフ」
- 2 講演会「俺たち」のその先へ
座談会「障がいをつくるもの、障がいを乗り越えるもの」
手話講習会(初級)
- 3 ミニレクチャー
オリパラとダイバーシティ
バリアフリー講習会
障がい学生の就活とその働き方
障がい者支援スタッフ制度説明会・パソコンテイク講習会
- 4 障がい学生支援
よるダイバー
一時保育施設「都立大KIDS」オンライン見学会を開催します





「男らしさ」がもたらす困難を捉え、男性の生き方を見つめ直す近著『さよなら、俺たち』が好評の、恋バナユニット「桃山商事」代表の清田隆之さんを講師にお迎えし、藤山が聞き手

となってお話をうかがう形式で進行しました。清田さんが学生時代に、友人たちの「恋バナ」の相談に乗っていたことが出発点となって始まった「桃山商事」としての活動では、今日までに1000件以上の相談を受けてきたそうで、たくさんの相談の論点整理をしているうちに、いくつかの傾向があることに気づいたといいます。

その中で清田さんが注目したのは、恋愛関係のない男性から女性に向けられた性的なLINEメッセージです。多くの場合、仕事などで付き合いがあり、男性の方が目上の立場にあるため、女性としては怒りや違和感を示すこともできず、受け流すような対応しかできない状況に置かれます。こうした事例を清田さんは「クソLINE」と名付け、男性が権力を利用して女性と関係をつくろうとする狡猾さを分かりやすく示す例として指摘しました。

そして、「シスジェンダー（身体的性別と性自認が一致している状態で異性愛者で健康で働いている）男性を「マジョリティ男性」として、いまの日本社会においてはマジョリティ男性が男性であるがゆえの特権を付与されているにもかかわらず、マジョリティであるだけにその特権に気づかない状態にあり、そのことがこうしたハラスメント的な言動やジェンダー問題を生む大きな原因になっていることを指摘しました。そのうえで、マジョリティ男性が自身のことを省みて、置かれた状況を「言語化」し、その特権性に気づくことが、こうした課題を解決していくための一歩になるのではという見方を示してくれました。

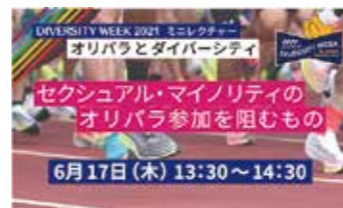
参加者からは、「身近な話題から『男らしさ』やその弊害について考える時間となった」「女性の視点からは見慣れた光景が男性の口から語られたことに意義があるのかなと思います」といった感想が寄せられました。（藤山）



DIVERSITY WEEKの3日目であるこの日は、学生支援スタッフを中心に座談会を行いました。この座談会は、障がいの有無に関わらず、人々が互いに障がいについての認識を本音で話す機会が欠如していることについて、話題提供をした上で話し合いをする、という流れで進行しました。

話題提供の中では、電車の中や公共の場で障がいのある方への配慮の提供の際に、お互いに気軽に配慮を提供しあえているのだろうか、という話題から、学術的に障がいを3分類に区分する考え方があることについて触れました。それらの話題を踏まえ、障がいのある人と無い人の間にある壁（障がい）を形成する要因にはどのようなものがあるのだろうか、またそれらを乗り越えるために社会や日々の生活の中で必要な取り組みや仕組みには何があるのだろうかという話題をグループに分かれ話しました。座談のグループでは、学生支援スタッフが司会を務め、本学の教職員も参加者として加わり、年齢や立場を超えて「障がい」とはどういう存在なのかということについて話すことが出来ました。

参加者からは「障がいについて皆さんと隔てなく意見を交わすことができ、とてもよい経験になりました。学部生、院生、職員の方々など様々な立場からの見方を知ることができて勉強になりました。」といった感想や、「座談会の中でお話されていたように、障がいのことについて意見を交換することは無いので、とても貴重な機会になりました。自分の視野がまた少し広がったと思います。」といった感想などがありました。障がいに関する理解を深めていく上では、一人一人の心の中にある障がい観について言語化していくことが非常に大切であり、今後とも学内でこのような立場を超えた障がいに関する議論の機会を設けていきたいと考えます。（益子）



スポーツ場面におけるホモフォビア（同性愛嫌悪）とそれによる同性愛者の排除といった問題や、トランスジェンダーの選手の競技への参加など、セクシュアル・マイノリティとスポーツをテーマとしたミニレクチャーを開催しました。レクチャーでは、まずセクシュアル・マイノリティについての基礎知識の説明から始まり、セクシュアル・マイノリティとスポーツをめぐる近年の世界的な動向の概要紹介、そして競技への参加に関して、トランスジェンダーの選手の場合、DSDs（性分化疾患・身体的な性が男性・女性のどちらの典型でもない状態にある、さまざまな状態の総称）の選手の場合について、それぞれ事例をあげながら、どのような議論が行われ、どういった課題が生まれているのかが紹介されました。

一口にセクシュアル・マイノリティと言っても、その現象は多様であり、スポーツの場面で直面する困難もその様態や個人人の状況によって大きく異なります。同性愛や両性愛など、性指向に関する現象については、著名な当事者アスリートのカミングアウトが増える傾向にあり、それに伴って少しずつ偏見も解消されつつあります。しかし、トランスジェンダーのなかでもMtF（男性として生まれたが女性としてのアイデンティティを持つ人）の選手が女性として競技に参加する場合や、DSDsのなかでも男性ホルモンの分泌量が平均的な女性よりも著しく多い女性選手が女性として競技に参加する場合には、その選手に対して否定的・批判的な声が多く向けられています。

こうした状況を私たちはどのように考えるべきか。誰にとっても納得のできる競技参加のあり方とはどのように構想されるのか。講師からは、簡単には答えが出ることのないこの問いが、スポーツに携わるすべての人が考えるべき課題であることが示されました。東京オリンピック・パラリンピックをきっかけに、こうした議論が広がり、深まっていくことを希望します。（藤山）



今回の講習会では、「障がい学生の就活とその働き方」というテーマで株式会社ゼネラルパートナーズの石原孝浩氏と戸田重央氏にお話をいただきました。

近年障がい者雇用は着実に進んでいるものの、障がいのある大学生の就職活動や彼らと共に働く上での配慮の方法に関してはあまり知られていません。そういった中で、石原氏からは障がい者雇用に関する基礎的な制度の枠組みから面接での対応まで幅広くお話をいただきました。特にその中でも、障がいのある学生にとっては、日々の生活の中で周囲にどのように障がいを開示し、配慮を求めるのが大事であることを指摘されていたことは貴重な体験でした。

参加者からも「就活や仕事の場面においても障がいの特性や必要な配慮について周囲にわかりやすく説明することの重要性を改めて感じました。」といった感想や「“できないだろう”と思わず“何ができるか”を本人に確認すると言うところが、仕事に限らず大学における活動でも同じだと思印象に残りました。」といった感想などがあげられました。また、戸田氏からは、超短時間雇用に関する取り組みの紹介があり、「働く」ということの選択肢の広さについて学ぶことが出来ました。

障がいのある方の雇用に関することは、今後彼らと共に働く可能性があるという意味で、すべての都立大生にとって重要なテーマとなってきました。

今後も、障がい者雇用については定期的な講習会を行っていきたいと思います。（益子）



手話講習会【初級】（全8回：5/13から7/8まで開催）



毎年、募集開始から4～5日で定員に達するほど人気の手話講習会ですが、今年も参加者は学部の1年生から大学院生、プレミアムカレッジの学生など多岐に渡りました。昨年度はコロナ禍ということで中止になりましたが、今年度はオンラインを軸に定員を減らして開催しました。7月に感染症対策をしたうえで開講された対面での「ろう者との交流会」では、それまで実際に見ることが出来なかった生き生きとした講師の手話表現を見て、受講生たちは驚くと共に充実した表情を見せていました。

手話講習中には、指文字や挨拶などの手話表現に始まり、趣味や出身地の話などを練習しました。都道府県の表現の際には、「標準語ではこのように表すけれど、実際にその都道府県に住む人の中にはこういうふうに表現する人もいるよ」といった手話表現の地域差に関する話題に触れたり、本学に在籍する聴覚障がい学生にも講師として関わってもら

ことで、幅広い表現の仕方について学ぶことが出来ました。参加者からは「手話出来るようになりたい!」と思い参加しましたが、とても勉強になりました。まだまだ実際に使うのは難しいけれど、交流会がとても楽しかったのもっと話せるように、もっと手話ができるようになりたいとも思いました!!」といった感想や「前期のみでしたが、とてもいい経験になりました!聴覚障がい者の方に自分の手話が伝わった時の嬉しさは忘れられません!!」といった話もありました。今後もこのような講習会を通して、コミュニケーションの幅広さや文化の違いなどについて学べる機会を引き続き設けていきたいと思います。（益子）



障がい者支援スタッフ制度説明会・パソコンテイク講習会

今年度の新1年生を対象に行った学生支援スタッフ募集は、新入生向けガイダンスから始まっています。障がいのある構成員支援を中心にまとめた動画を作成し（手話通訳/字幕付き）、これをガイダンス時に上映することで多様な学生が本学に在籍していることについて周知しました。4月8日及び13日の障がい者支援スタッフ制度説明会はオンライン開催し、2日間で45名の学生が参加してくれました。

パソコンテイク講習会は、4月19日より合計15回、本学で昨年度より導入しているcaptiOnline（キャプションライン）を用いた通訳の方法をテーマとして実施しました。初級講座（レベル1/レベル2）を、オンラインと対面のハイブリッドで実施し、延べ35名の学生が参加しました。

今年度の講習会は、先輩支援スタッフと共に、改めてスライドや使用する教材、パソコンテイクの重要ポイント等の相談をしながら進めたことで、先輩支援スタッフにとっても大きな学びが得られた様子でした。

さらに、今年度は講習会を行う際に字幕付きの動画を作成することで、聴覚障がい学生が講師を担当しやすくなる仕組みを作りました。



講座の様子は、レベル1では基本的な技術を学び、実際に入力を体験すると「タイピングが追いつかない」「連携入力の相手と沢山ぶつかってしまう」といった課題に苦戦する様子も見られました。レベル2では更に入力時間を延ばし、応用技法についても学ぶ講座でしたが、いずれの講座でも先輩から「最初はこういうときもある」「私も今でもよくぶつかっちゃうけど、こう工夫しているよ」といった励ましやアドバイスの声もあり、支援スタッフの能力が大きく向上し、また支援スタッフ同士のつながりも強まる機会であったと思います。（益子）